

# 未来

郵政産業ユニオン  
**PIWU**  
 全労協・郵政産業労働者  
 ユニオン長崎中郵支部  
 機関紙「みらい」  
 NO. 3881  
 '18年8月17日(金)  
 Fax 095-828-1953

# 原爆はなぜ長崎に投下されたのか？

おはようございます。

夏休みに親戚が来崎して、原爆資料館などを案内した。その途中、展示されている原爆の模型を見ながら、「なぜ原爆が長崎に投下されたのか」と聞かれた。あなたならなんと答えますか。

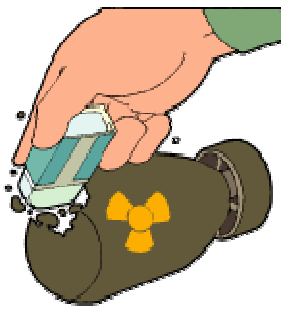
私は「三菱があったからです」と答えた。本当か。

元、毎日新聞ニューヨーク支局長の大森実が書いた「戦後秘史」(講談社)の「天皇と原子爆弾」に、アメリカ軍の従軍記者として長崎原爆投下のB二九の飛行機に同乗したニューヨークタイムズの記者(ビル・ローレンス)の記事を、以下に報告している。



「われわれは日本本土へ向かってきた。飛行編隊は三機であるが、先頭の飛行機には

原爆が搭載されていた。われわれは、飛行中、数か所の選択可能な目標をもっていた。その一つが、日本本土の九州西岸に位置する日本の造船工業都市のナガサキであった。第一目標、第二目標地点、ともに視界良好」と叫んだ。風は少し強くなった。編隊は何回も大きな旋回をくり返した。



私が見た限り、雲は分厚く雲の裂け目はなかった。まるで雲の傘だ。運命の風は、ナガサキを目標として選択したのだ。黒煙がはねた。地上から十五発の対空射撃があったので、機長のボックス少佐がコースを変えた。

機首はナガサキに向けられていた。やっと雲の切れ目を見つけ出し、長崎上空に達したのは十一時一分であった。機内のラジオがあらかじめセットされた約束通り、シグナルを発したので、われわれは眼鏡をつけた。私は息を殺して半マイル先を飛ぶ攻撃機に注目した。

『行くぞ』と誰かの叫び声が聞こえた。「巨大なる芸術

家”の大きな洞の中から、真っ黒い物体が一つ静かに落ちていくのが目撃された。私が乗っていた観測機のボックス機長は、危険ゾーンからフルスピードを出して脱しようとした。機内に白いせん光がひらめいた」と、長崎原爆投下の瞬間を書いています。

原爆投下の目標地点に造船所があるナガサキとするアメリカ軍の意思は、軍需工場を破壊する目的がありました。なぜ長崎に原爆が投下されたのかは、三菱造船所という軍需工場があったからです。

戦争末期の一九四〇(昭和十五年)年に三菱造船所で作られた戦艦・武蔵は、日本海軍



の司令官が乗る最後の旗艦でした。ちなみにそれまでは戦艦・大和が旗艦船で、(広島(兵)で作られています。当時の戦争は空母で戦っていたので、日本海軍力の破壊が、その目



的でした。だから、日本海軍の象徴「旗艦船を作った広島長崎が原爆投下の標的となったことは歴史的事実です。

戦後七三回目の八月九日の長崎原爆忌の市民集会で、長崎市民ネットの舟越さん(元長崎大学教授)は、「加害の戦争の歴史を明確にすべきだ。長崎に原爆が投下されたのは三菱という軍需工場があったからだ。日本がハワイの真珠湾を攻撃し、太平洋戦争が始まったが、そのとき使われた魚雷は長崎の三菱工場で作られたのだ。長崎市民は原爆の被害者だけではなく、加害者でもあるのだ」と加害の歴史を語られている。

私たちが、七〇数年前のことであるが、長崎と原爆投下で、歴史を学ぶべきである。

これまでは過去である。では今はどうか。現代は原子力空母が旗艦船であり、これを主力とした海軍力があるが、これを補つ戦力として今はイージス艦がある。

世界のイージス艦は四〇数隻だとされるが、大半はアメリカが持ち、日本は七隻保有

している。日本は世界第二の海軍力なのだ。この軍艦は世界を同時に二百か所攻撃。迎撃できる能力を持つ。建設費用は一隻一千億円ほどとされるが、五隻は長崎の三菱造船所で作られている。長崎は今も日本最高の軍需工場の町なのだ。

近隣国が新たな核戦争の危機をいつたとき、西日本のいくつかの都市が標的とされたなかでも現代の軍需工場があるナガサキがそこにはいることは明らかだろう。近隣国の戦争や核攻撃は不当であるが実際の被害の可能性は、ゼロではない。



ということ、世界の反核平和の運動で、常にいわれる「長崎を最後の被爆地」という標語は、一部に訂正がいる。本当は、次の被爆地はナガサキかもしれない、ということなのだ。わたしたちはこの危機意識を持ち、平和運動をたたかつことが、今の長崎市民に求められている。

\*\*\* \*\*

、裏面に、八・八平和集会宣言文を掲載します。

仲間と競争せず、弱い立場の人と共に団結して闘おう。

期間雇用社員の希望者全員を正社員化する。

めぞせ、均等待遇、なくそう差別!

ユニオンは労務法裁判に勝利するぞー!

期間雇用パート労働者の皆さん! 困りごとは職場の郵政ユニオンへご相談を。

1集-山本, 2集-向井, 3集-山田, 郵便-高田, ゆうちょ銀-上筋, 東-松岡, 他支部・分会の役員へ。

## 集会宣言 平和はたたかいとるもの

今年、夏の甲子園は100回目だ。被爆73年目の8月9日の長崎原爆忌に、偶然にも長崎の高校球児が、甲子園で黙とうし、実際に対戦をする。選手宣誓でも「野球ができる平和の幸せ」といったが、いったい平和とはなにか。

過去、この大会は戦争で4年間も中止されたが、実は100年前の1918(大正7)年にも米騒動で中止があった。だが、この理由は歴史の一面である。史実では、この年、朝日新聞が「軍部批判」を理由に、国から発刊停止とされ、編集者も社を追われる。また軍閥内閣と一体の右翼が朝日新聞社を襲撃し、社長も負傷し、辞職し、また新聞社も反省の社告を迫られた。いわゆる白蛇事件と呼ばれるが、朝日も廃刊の危機のなか、野球どころではなかったのだ。

だが政治的には、これはただの護憲・新聞社へのテロ攻撃ではなく、大正デモクラシー＝民主主義の復権を嫌う国と軍部、右翼らの言論弾圧であり、国の行方を決める大事件で、その後、朝日も翼賛紙と化し、日本は戦争へと転がる。

平和には二つある。一番は外と戦争をしない国であり、内には国民の基本的な人権が保障され、自由に生きられることだ。この二つがあってこそ真の平和だ。

さきに来日したドイツの哲学者・ガブリエルは、「人の尊厳が国の基本」＝ドイツの戦後・憲法の第一条をあげ、「たとえ国民の95%が賛成してもユダヤ人を殺してはならない」とする。平和とは外にも内にも尊厳を共有する社会なのだ。

日本について彼は、国民の従順性や整然とした社会の秩序を「抑圧の反証」だとする。こうした過度な抑制＝秩序と競争により、国民の中の弱者は、格差に苦しみ、心を病み、社会から脱落し、国全体も息苦しさで閉塞感が覆う。

確かに甲子園では100回記念大会で若者のプレーが続くが、政治的には100年前と酷似し、安倍内閣や保守派が、新聞社やテレビ局を「偏向だ」、「免許取り消した」と攻撃する。日本はいま自由で平和なのか。沖縄の辺野古では反基地の人々が蹂躪(じゅうりん)され、福島原発事故はいまま被災が続き、広島、長崎の被爆者は、いまま苦しんでいる。内なる国民の平和は脅かされている。

戦争の時代から再生した戦後日本の平和も、若者がいう野球ができるいまの幸せも、戦後世代のたたかいによるものが大きい。わたしたちは明日もまたたたかい続けて、若者世代に平和の国・日本をバトンタッチしたい。

2018年8月8日、  
第22回、8・8平和を考える長崎集会

